

師弟関係について一考

弁護士 森貞 涼介



1 『下流志向—学ばない子どもたち働かない若者たち—』（内田樹、講談社、2007年）を再読する。著者の内田は、本書出版時は神戸女学院大学文学部教授であった。本書は、「学びからの逃走・労働からの逃走」を主題として、内田は、子どもたちが「教育を受ける権利」を放棄することと、若者が「労働する権利」を放棄することを同一の社会的趨勢の現れと位置づけ、その原因を考察している。

本書は、出版から9年が経っているが、最近読み返して心に残ったところがあるので紹介したい。教育論を論じるなかで、先生と子どもの関係について述べる一節で、内田は、映画『スター・ウォーズ』シリーズを通じて、映画のメインテーマが師弟関係であることに気がついたと言う。

『エピソード2』と『エピソード3』では、弟子の方がメンター（先達）よりも腕前が上になってしまうという逆説が物語の縦糸になっている。アナキン・スカイウォーカーは、「俺は師匠オビ=ワン・ケノービよりも才能がある、俺の方が強い。」と言い出して、オビ=ワンよりも強いメンターを求めて、銀河皇帝の仲間になる。フォースのダークサイドに導かれ、ますます力を得たはずのアナキンは、『エピソード3』の最後に、オビ=ワンと対決したときほろほろに負ける。

内田は、ここから「師であることの条件」を導く。「師であることの条件」は、「師を持っている」ことである。弟子として師に仕え、自分の能力を無限に超える存在とつながっているという感覚を持ったことがある。ある無限に続く長い流れの中の、自分は一つの環である。長い鎖の中のただ一つの環にすぎないのだけれど、自分がいなければ、その鎖は途切れてしまうという自覚と強烈な使命感を抱いたことがある。そういう感覚を持っていることが師の唯一の条件だ、と。そして、自分は師匠を超えたと思って、鎖から離脱した者は、成長を止めることとなる。

アナキンに背かれた後でも、オビ=ワンの自身の師匠ヨーダに対する深い敬意は少しも変わらない。だから、弟子に離反された後も、オビ=ワン自身は成長を続けることができる。師を超えたと思った瞬間にアナキンは成長を止めるが、師は超えられないと信じてい

るオビ=ワンは成長を止めない。ここでいう「成長」とは、計測可能な技量のことではない。計測可能な技量について言えば、師の方が、先に年老いていくのだから、弟子が師を超えることは、ある意味当然である。しかし、どれだけ技量が上がろうとも、自分の中の「ドア」が、自分には超えられないものに対して開かれていて、そこから滔々と流れ込んでくるものを受け止め、次の世代に流していく。そのような感覚を持ち続けている限り、人は成長し続けることができる。アナキンは、「俺は師よりも強い。」という自信を得た瞬間に「ドア」を閉ざして自己完結した存在となり、成長を止めた結果、オビ=ワンに敗れ去る。

内田は、極論すれば、「先人から受け取って、後代に手渡す」ことが師の唯一の役割であり、それができれば誰でも師として機能すると結んでいる（内田は、アメリカ人のジョージ・ルーカスになぜこのような「師弟」関係が分かるのか、という疑問に対しては、ジョージ・ルーカスには黒澤明という「師匠」がいたからだと答える）。

2 私がこの本を読んだのは、2008年頃だから、大学1年生ぐらいだった。当時、私は、『スター・ウォーズ』の6作全てを観ていたけれど、特に気にしていない一節であった。最近になって読み返して、そこに書かれていることが心に残ったのは、自分が弁護士として師を持ったからであると思う。弁護士経験が短い私が言うのも何であるが、やはり弁護士の仕事は、裁量の幅が広くて、マニュアル化できない部分がかなり多いと感じる。そのような特殊性をもつ仕事であるがゆえに、新人弁護士は、師匠を手本とし、その人から受け取った仕事のやり方を基本として成長していくのだ。だから、弁護士業界では、師弟関係が今も昔も変わらずあるのだろう（昔のことは想像でしかないのだけれど）。

『スター・ウォーズ』の教訓。自分には超えられないものに対して「ドア」を開き続けている限り、成長し続けることができる。自戒を込めてここに記しておくのである。